

国際学会出席旅行記

II

第2回目の海外旅行

鈴木 洋

第4回原子物理学国際会議とスターリング・シンポジウム出席

1973年夏のベオグラード（ユーゴスラヴィア）での初めての国際学会出席に続いて、翌年1974年には原子物理学国際会議に出席することになりました。原子物理学国際会議は The International Conference on Atomic Physics (略称 ICAP) といわれ、狭い意味の原子物理学の基礎的な課題を全て含むという趣旨の学会で、IUPAP (International Union of Pure and Applied Physics) の A カテゴリーに属する主要な会議ですが、原子衝突や量子エレクトロニクス・量子光学等の分野が独立に大きな会議を作っているため、それ自身はあまり大規模な会議とはならず、例えば前の年のベオグラードでの原子衝突国際会議の参加者が約600名であったのに対し、ハイデルベルクで行われたこの会議への参加者は420名であり、日本からの出席者は3名でした。

私がこの会議への参加を決めた動機は2つありました。一つは当時広島大学の鳴海元先生が ICAP の General Committee のメンバーであられ、私に是非出席するように勧めてくださったことでした。もう一つは、この年上智大学での先輩・同僚の鈴木皇（ただす）教授がエディンバラ大学に滞在しておられ、ICAP の期間の直前にそのサテライト・ミーティングとしてエディンバラの近くのスターリングで「電子と光子の原子との相互作用」というシンポジウムが行われるので、スコットランド見物を兼ねて来ないかというお誘いがあったことでした。

この度は7月8日に羽田国際空港からエールフランス航空に搭乗、北回り（アンカレッジ経由）で9日にシャルルドゴール空港に着きました。パリでの宿はエッフェル塔の近くの地区にある小さなホテルで、おかみさんが英語を話せるので便利だろうということで、この度の旅行の手配をしてくださったお人（大きな旅行社を引退して後、個人で旅行の世話を仕事にしている人。その後何度かこの人に世話になりました）が予約しておいてくれた宿に入りました。空港からホテルまで大きな灰色の建物ばかりのパリの街中をタクシーで走る間、な

んだかひどく心細く孤独な気持ちを味わったのを覚えています。

パリ南大学・原子分子研究所を訪問

パリでの初めての夜を過ごして後7月10日朝、予め手紙でアポイントメントを取っておいた通り、オルセーにある南パリ大学の原子分子研究所にバラ教授(Monsieur Michel Barat)を訪問しました。

バラ氏は遅いイオンと原子の衝突で起こる励起や電荷移行過程の研究で有名な人で、理論家でもあり、異核イオン-原子衝突による励起過程を透熱ポテンシャル図を使って解析する「バラ-リヒテン則」の提唱者として特に有名でした。当時上智大学の研究室でもアルカリ金属イオンと希ガス原子の低エネルギー衝突実験を始めたところでしたので、一度この実験室を見学したいと願ったわけです。

パリ市内の地下鉄からそのまま郊外につながって行く電車で、かなり田園風に思える地域にある研究所のキャンパスへたどり着きました。

まず驚いたのは、管理人室にいた守衛のおじさんが朝から既に相当ワインをきこしめしている様子で、アルコールのにおいを発散させながら、結構重々しい態度で案内してくれたことです。バラ先生は特に訪問者を待っていた様子もなく、かなり待たされた後現れて、たいして興味もない様子でしばらく話した後、研究室の案内は女性の研究者ジャクリーヌ・フェイトン(Mademoiselle Jacqueline Fayton)に任されました。

実験室はかなり狭いながら、数台の中型の装置がぎっしりと陣取っており、たいへん充実した感じでした。上智大の実験室での、イオン・原子衝突実験では、衝突の際に作られる超励起原子の自動電離によって放出される電子スペクトルを観測するのが、唯一の測定手段でしたが、ここバラ研究室では、衝突後の発光スペクトルを観測する分光器類、衝突後の生成分子を同定するための質量分析器などを備えていたように思います。フェイトン嬢はファイト満々の若手研究者で、近くで見るとたいへんセクシーな方で驚きました。ご自分の体で人を押しつけるようにして、装置の間を歩き回り、親切に自信満々の英語で説明してくれるのですが、すごい French accent なので、詳細はじゅうぶんには理解できませんでした。

お昼になって、キャンパスの学生(職員)食堂でバラ氏のグループの人たちと一緒に昼食を採りました。日本の学食と同じでセルフサービスなのですが、

料理の種類が多さ、分量の多さはたいへんな違いです。ほとんどの人が数人で1本のワインを開けて飲んでいました。フランスに来たなという実感がありました。

バラ氏にはその後パリでの ICPEAC をはじめ、国際会議の度に会うことになり、だんだん親しくなりました。私の目から見るといかにもフランス人（アルジェリアの血が少々入っているかも知れません）らしい茶目っ気のある自由人という感じの人でした。後に私の若い親友大谷俊介氏は、名古屋大学プラズマ研究所時代の国費留学の場所をここに選んだのです。1年間、パリ市街の真ん中に住んで、ここオルセーに電車で通ったそうです。

マンチェスター大学物理学教室訪問

7月12日、パリから空路マンチェスターに行き、そのまま空港からタクシーで大学へ行きました。Franck Read 先生に手紙でアポイントメントを取ってあったのですが、リード先生はこの日は都合が悪かったようで、講師の Dr. Comer に私の相手を依頼しておいてくれました。コーマー氏は私に会って、この日の宿の手配など色々と親切に手配りをしてくれたのですが、偶然この日はコーマー氏の奥様の出産予定日に当たってしまい、実験室の案内を大学院学生に依頼して、そそくさと出かけて行かれました。

マンチェスター大学のリードグループはご承知のように、当時電子散乱実験のメッカのようなところでした。実験室はたいへん広い部屋に5～6台の電子衝突スペクトル装置が広々と配置され、それぞれ、世界第1級の性能を誇っているようです。私にとって、ここではほとんど説明は要りません。装置とその側に掲示された電子スペクトル図をみれば総て理解できます。装置の分解能の優秀さと、テーマの斬新さにただただ感服するばかりでした。

一方、私を案内してくれた大学院生は日本文化に特に興味をもつ人だったようで、実験室案内の後は、禅だの空手だの私にとって得意でない分野のことをいろいろ聞かれて、ろくな答えが出来なくてたいへんお気の毒な気がしました。この院生氏は初めて会う日本人に好意を持ったのか、わざわざ、正門のところまで見送りにきてくれました。

この夜のホテルは豪華でした。コーマー氏が電話で「京都からきたプロフェッサーが泊まるのだ」などと言って予約してくれたせいでしょう、ツインベッドの枕元にも洗面台が付いていたり、

バスルームはダンスパーティができるくらい広いのです。この日の夕食はホテルで摂りました。外の町に出かけてどこか気楽な食堂を探したかったのですが、ちょうどこの時期、マンチェスターでは IRA（アイルランド共和軍）による爆弾騒ぎがあり、夜の外出が不安だったのです。ホテルのメインダイニングではちょっと恥をかきました。料理はローストビーフを注文したのですが、ソムリエと称するおじさんがやってきて、何年の何とかワインを今日はお勧めするなどと言うのです。当時はまだレストランでワインを注文したりする経験がなかったので、面倒なことになったなーといささかたじろぎました。「わたしはビールでいいよ」と言うと彼は呆れた表情をして、「Beer ? Very good, Sir.」と言って立ち去ってしまいました。ビールはあとで大人しそうな少年が運んできました。

翌朝は鈴木皇さんを頼って、エディンバラへ行く日です。この朝、マンチェスターの駅はコインロッカーがみな閉鎖され、手荷物預かり所も開いておりません。最近ロッカーで爆発があったためだそうです。これからの長旅のための20kgのトランクと機内持ち込み最大のショルダーバックを抱えて、発車の時刻まで駅に足止めされ、マンチェスターの町はついに見物することができませんでした。

エディンバラ訪問

列車でエディンバラへ向かったのですが、途中機関車（ディーゼル機関車でした）が故障して、エディンバラへの到着は数時間遅れました。鈴木皇さんは駅で私を待ってくださったのですが、遅延の状況を聞きながら、何遍か宿舎との間を往復なさったそうです。それでも全然いやな顔一つなさらず、機嫌良く出迎えてくださいました。

宿舎はエディンバラ大学の学生寮で、皇氏が予約しておいてくださったのです。イギリスやヨーロッパの大学は原則として全寮制で、すべての学生が寮で暮らすのですが、夏休みの期間中は部屋を明け渡さなければなりません。学生は夏には旅行に出るか帰省すべしという昔からの仕来りが残っているのでしょう。空いた部屋は休暇期間中に大学が催す行事に参加する旅行者や、訪問研究者のために使わせるのです。この寮は Pollock Halls of Residence という名で、Holyrood Park に接して建てられ、Arthur's Seat と呼ばれる丘の裾野にあり、裏の木戸を出ると直ぐに、羊達が群がって草を食んでいる丘の斜面に出られます。丘に登れば尾根伝いに1キロ余りの尾根歩きが楽しめます。ここからは総て数

世紀以前に建てられたであろうクラシックな建物の薨の波の向こうに、遙かにエディンバラ城が望めます。まさに、お伽の街に迷い込んだような気持ちでした。

エディンバラでは皇氏の案内で、観光バスに乗ったり骨董品を売る店の並んだ裏町を歩いたり、たいへん充実した見物ができました。観光バスは運転手自身がガイド役も兼ねており、強いスコットランド訛りで堂々とした演説をします。スコットランドの歴史的詩人 Sir Walter Scott の生家の前では、詩の朗読も聴かされました。余談ですが、このツアーではチップのあげ方を勉強しました。最後にバスを降りるとき、乗客は皆ガイド氏にコインをあげるのですが、出口で握手をしながら、そのまま手に握らせるのです。Enjoyed a nice guide. とか、Thank you. とか、Bye-bye. とか言いながら 20~50 pence のコインを渡すのですが、ガイド氏は Thank you. Thank you. と言いながら手元など見ず、そのままポケットに入れて次の客と握手します。全然あげない人もいるかもしれませんが、1 pound も上げる人もいるかも知れませんが、平等です。なかなかスマートなやり方ではありませんか。

また、エディンバラ大学の皇氏のホストサイエンティスト（量子光学かレーザー分光学の教授だったと思います）のところに表敬訪問もいたしました。3日間の楽しいエディンバラ訪問を終え、スターリングに移ります。

Stirling Conference: “Electronic and Photonic Interaction with Atoms”

参加

エディンバラから列車で3~40分でスターリングに着きます。スターリング大学のクラインポッペン(Kleinpoppenn)教授がハイデルベルクで行われる ICAP のサテライト・ミーティングとして計画したこのシンポジウムは、なぜか Ugo Fano 先生にデディケイトされると銘打っており、電子・光子と原子との相互作用を主題とするものでした。

スターリング大学は第2次大戦後新制大学として設立されたスコットランド中南部の大学で、キャンパスそのものが人工的に開発された正に絵のように美しい環境にあります。キャンパス中央の湖も大学のためにあたらしく掘られたのだということです。もちろん学生寮も完備しており、湖に臨んだ清潔な宿舎で我々も5日間を過ごしました（7月15日~19日）。このシンポジウムには皇さんと私のほかに高柳和夫先生も参加されました。

Kleinpoppenn 教授はドイツ人ですが、その手腕を買われ新しいスコットランドの大学へ招聘されたのでしょう。当時、電子と原子の衝突に関する多様な実験でぬきんでた成果を挙げていたグループの主催者でしたが、特にスピン偏極した電子ビームを使った電子・原子衝突の実験では世界をリードしていました。

この会は遠くから呼んだ人々をもてなすためクラインポッペン氏が特別熱をいれたのか、バンケットは素晴らしく楽しいものでした。辺りの平野を見下ろす、スターリングのお城を借り切って大広間で着席してフルコースディナーです。宴会の始めはハグスとか呼ばれる特大の腸詰めを古いスコットランドの衛兵のようななりをした男たちが隊列を組んで行進して運んできます。これはあとで適当にカットしてお客の皿に配られました。ただ驚いたことに、食前酒として配られたのはシングルモルトウイスキーでした。あえてシェリーとかシャンパンにしないで、スコットランドらしい素朴な誇りを表したのでしょうか。宴会のあとにはバグパイプの演奏、それを伴奏にスコティッシュダンスのショーがあり、さらには参加者全員が次々と引っ張り出されて踊りに参加することになります。

また、エクスカーションが素晴らしいものでした。スターリングからそれほど遠くない Loch Katherine という湖の船遊びでした。数年ぶりにファノ先生にお目にかかったり、低エネルギー電子散乱実験の初期に一世を風靡したマルメ教授 (Prof. Marmet、カナダのケベック大学) に初めて出会ったり出来て、実に楽しい一日でした。

このシンポジウムの Proceedings が翌年には配られたはずですが、今ちょっと見あたりません。恥ずかしいことに、この会での講演を聴いて勉強したことは、いまほとんど思い出せないのです。

こうして5日間の会を終わり、美しいスターリングを後にして、列車でロンドンに戻り、1泊して、21日(日)フランクフルト経由、ハイデルベルクに入りました。

第4回原子物理学国際会議 (The fourth International Conference on Atomic Physics : The 4th ICAP、7月22日～26日、1974) 出席.

この期間中のホテルは学会事務局で世話してもらったBカテゴリーのホテルで、ネッカー河 右岸の山の手にあり、地味ながらたいへん清潔な宿舎でした。

ヘルツベルク先生（1971 年度ノーベル化学賞受賞者、原子スペクトル・分子スペクトルの古典的名著で有名）もここに泊まっておられ、ある朝などは同じテーブルで食事する光栄にも浴しました。控えめな若い奥様を伴っておられ、後から知ったのですが、秘書だった女性と最近再婚されたところだったようです。会議は左岸川上の新開地に造られたハイデルベルク大学の理工学系のキャンパスで開かれており、そこへは市街電車を乗り継いで通いました。

当時は contributed paper もすべて口頭発表で、私は「電子衝撃で創られるヘリウム²電子励起状態からの自動電離スペクトルの測定」を発表しました。そのデータは Book of Abstracts[1]に載っています。200編ほどの投稿論文を載せた Book of Abstracts の本は会議中に配布されましたが、翌年 Plenum Press から出版されています。

自動電離電子スペクトルのプロフィールが衝撃電子のエネルギーと観測角によってどのように変化するかを詳しく調べた実験結果です。私が自分自身で測定した実験結果（自分では会心の作と思っているのですが）で、このデータはその後本論文として発表する機会を逃してしまいましたので、私にとっては一番大切な生論文のひとつです。私の発表に対する参加者の反応はたいへん好意的で、一部の方々からは褒め言葉をいただきました。電子-原子衝突に関する発表を集めたセッションでは私が session chairman を勤めました。この会議の Local Committee の chairman はハイデルベルク大学教授の Zu Putlitz という方でした。Zu という称号は Von の次に偉い貴族の称号だそうです。この方は量子光学関係の研究グループの指導者で、西ドイツの原子物理学関係分野全体でも大きな影響力をもつ人だと聞いておりました。実は会議に参加登録したすぐ後に、このセッションのチェアをやるように依頼状をもらいました。私は国際会議で座長をやった経験がまだありませんでしたし、理論の論文も沢山含まれているようでしたので、理論の論文は十分理解出来ないかも知れないからという理由で辞退したい旨一度手紙で返事したのですが、大丈夫だから是非やるようにと二度目の手紙までもらいました。たぶん日本から3名しか参加しないので、将来の日本からの参加を奨励する意図でこうされたのではないかと思います。

全体会議 (Plenary Session) では30編ほどの招待講演が行われました。この会議は狭義の原子物理学のすべての分野を含むので、原子分子スペクトル、量子光学、レーザー分光、原子衝突などのほかに、量子電磁力学に関する問題、

exotic atoms、物理法則における対称性の問題、等々たいへん多岐にわたるので、招待講演の大部分は普段勉強する機会のない物理学の他分野の新しい知識を勉強する機会と考えて努めて聴講するようにしましたが、すべて大まかな概念を得ることで満足するほかはありませんでした。この会議の招待講演集は Atomic Physics という題の Proceedings として 1975 年に出版されています。私の印象に残っているのは、ヘルツベルク先生が講演の前置きで、「ドイツ出身の私が此所ハイデルベルクへ来て皆さんに英語で話すことになるろうとは、感無量です。」というような意味のこと話されたことや、マンチェスターのリード教授が講演の前置きを妙に不自然なドイツ語で話し始めたことなどでした。

この会議への鳴海・高柳両先生と私による参加報告は、翌年の物理学会誌に載りましたが、ICAP という会議の性格や、当時のトピックスを知るのに役立つと思われます[2]。

バンケットは素晴らしいものでした。その後 20 数回大きな国際会議のバンケットを経験しましたが、最も印象に残っている催しの一つです。有名なハイデルベルクのお城の大広間で、フルコースディナーです。入り口を順に入って行くと赤い筒を渡されます。この筒の中には古いハイデルベルクの街の立体地図が入っていました。たいへん気の利いたプレゼントなのですが、この筒に書いてある番号が自分が着くべき席の番号になっているのです。料理もドイツ料理としては十分に繊細であり、満足すべきものでした。料理が終わりに近づいたころ、消防士のような服装の人たちが何人か目立たぬように走り回っているので、何だろうと思っていると、間もなく城のテラスへ出て花火を見物するようにアナウンスがあります。ハイデルベルクでもこのような大仕掛けな花火ショーは年に一度くらいしか行われぬそうですので、たいへんなサービスだったわけです。

エクスカージョンはネッカー河のクルージングでした。夕暮れになると山側の森の中で、バーベキューパーティーが行われました。ツー・プットリッツ教授のご長男の美しい少年が斧で薪を割ったりしてお手伝いに活躍していたのが印象的でした。また、座長などの役を勤めた人々だけはこの他に、ツー・プットリッツ氏の家にも招待されました。

この街の旧市街、ネッカー河の右岸の一角には古い大学の建物が散在しており、街全体が中世の大学の面影を止めており、まさに大学街と呼ぶに相応しい所です。毎夕私たちはこの街に出かけて、この辺りを散策し、古いドイツの居

酒屋の雰囲気留めた Kneipe で夕食を楽しみました。Roter Ochsen (赤い雄牛) と呼ばれる有名なビアハッレへ、アメリカから来た原子衝突研究者達を連れて行って奢ってあげたのですが、アメリカでは飲み屋で人に奢るといような習慣はないらしく、この方達には何年も後に別の国際会議で会ったときに、お礼を言われたことなどありました。また、当時此処のマックス・プランク研究所に滞在しておられた東京都立大学の広瀬立成教授が私たち三人を自宅に招待して一夕の接待をしてくださったことも嬉しい思い出です。

私はその後、ドイツの大学に1年間滞在する機会を得、この街を何度か訪れる機会を得ましたが、この時ほど新鮮な感激を味わうことはありませんでした。しかし、この街は訪れるたびに新しい好いことを私に与えてくれました。ハイデルベルクはドイツ的なすべての佳いものを具現する街として、私の心に今でも住みついていきます。ドイツの民謡に「ハイデルベルクにヘルツを置いてきてしまった」というのがあるそうですが、その気持がよく分かるような気がします。

会議が終わり、鳴海・高柳両先生とお別れして、一旦パリに戻り、週末を過ごしてから、翌週ミュンヘン郊外のガルヒングにあるマックス・プランク研究所に滞在しておられる名古屋大学プラズマ研究所の大塚正元氏を訪問しました。

Max Planck Institut (München) 訪問

7月22日(日曜日)にフランクフルトから夜行列車でミュンヘンに向かったのですが、うっかりしていて、気が付いてみると、ミュンヘンに着く時刻が夜中の12時頃だと分かりました。今夜の宿は駅に着いてから案内所でとってもらえばよいと漠然と考えていたのですが、真夜中では駅の案内所も開いていそうもありません。不安になっていると Zugsekretärin (ツークゼクレテリン、列車女性秘書) と呼ばれる女性の係員が2人、何か用事はないかとしばしば聞きに来ます。ユーレイルパスで乗っているので1等車です。思い切って呼び止めて、ミュンヘンでのホテルの今夜の予約は出来るかと聞くと、出来ますと言って喜んで、分厚いリストを持ってきて、何ホテルにするかと熱心に聞いてくれます。リストの中に Bayerischerhof (バイエリッシャーホーフ) というのがあって高そうですがとても好い名前だし、ちょっと見栄を張りたい気分もあったので、これを予約してもらいました。鉄道電話を使うので幾らかの料金が掛か

るのですがたいした額ではありません。こういう場合チップを上げるのかどうか知らないのですが、思い切ってあげてみると喜んで受け取ります。このあと、彼女らは私の側らを通り過ぎるたびに、ウィンクしてゆくので、よい気分でした。

その夜は広々とした清潔なツインの部屋で鋭気を養った後、翌朝ガルヒングのマックスプランク・プラズマ物理学研究所を訪ねました。ここは核融合研究の基礎を研究するのが主目的の研究所で、小型のトカマク型プラズマ閉じこめ装置があり、大塚氏はこの装置を使ってプラズマ分光計測の研究をしておられました。大塚氏はざっと現場を一通り案内して下さったのですが、彼の様子には他所の国の特別の施設に来ているといった気負いはほとんど感ぜられず、名古屋のプラズマ研究所におられるときと変わらぬ落ち着いた態度でした。感心したのは他の所員とすべて流ちょうなドイツ語で話していることで、太平洋戦争の末期に旧制高校を2年で追い出されてしまった私などにはとても真似できないと感じました。ちなみに、大塚氏は私より1才若く、旧制高校2年の時大戦が終わり、卒業年限短縮が解除し3年間みっちりドイツ語も勉強できたのでしょう。

誰か他に会いたい人はいるかと聞かれたので、当時ロツツの経験式（電子やイオンの原子・分子との衝突断面積の推測値を求めるのに役立つ経験式）の提唱者として有名だった W. Lotz 博士がガルヒングにおられると聞いていたので紹介していただきました。大塚氏が電話で依頼すると、すぐ会ってくれるとのことで、部屋を訪ねて2～3の質問をしました。質問は学問的な内容よりも、核融合研究のための原子分子データの収集・評価の仕事をどう考えておられるか、またそれを組織的にやる計画を立てておられるかといったことを主に尋ねたように思います。私が英語で聞き始めると、大塚氏は私がロツツ氏とドイツ語で話すと思っておられたらしく、ちょっと意外だといった顔をされたのを覚えています。ドイツに来たらドイツ語で話すのが礼儀だと思っておられるのだなと感じました。

研究所訪問の後大塚氏の自宅に招待されて、奥様お手製の和食と上等のワインをご馳走になり、楽しい一夕を過ごしました。大塚氏の奥様は眼科のお医者様で、もちろんドイツ語は十分達者であられ、ミュンヘンでの生活を楽しんでおられた様子でしたが、一方日本のご両親やお友達との文通と電話に明け暮れておられるというお話でした。

ドイツでは郵便屋さんは各住宅ごとに担当者が決まっています、ほとんど隣人同様の親しみを持たれているのがふつうですが、大塚家担当の人は特によい人だったらしく、大塚夫人はこの郵便屋さんと友達のように仲良くしておられたようです。ある時郵便が来たのを喜んで鍵を持たずにドアの外に飛び出してしまわれたためご自分の家に入れなくなって、ベソをかいてしまいました。郵便屋さんはすぐ隣のフラットの主婦に頼んで家に入れてもらい、その家のベランダから大塚家のベランダへ乗り移って中から鍵を開けて、大塚夫人が戻れるようにしてくれたということです。日本やその他の国の都会ではちよっと考えられないことです。

またこんな話も出ました。大塚氏と同伴で郵便局に行ったとき、居合わせた年配の婦人がこっそり大塚夫人に忠告したのだそうです。「あんな年上の男と付き合っていると欺かれるよ。気をつけなさい」。大塚夫人は日本人としてはどちらかというと背も高い方なのですが、ドイツ人から見ると幼い少女のように見えたのでしょう。大塚氏のほうはこの話を聞いてむしろ愉快そうににこにこしておられました。こうして、私は上等のバーデンワインを2～3本平らげて、真夜中近くタクシーを呼んでもらってホテルに帰りました。驚いたことに、この時間にホテルではまだダンスパーティーが続いているらしく、イブニングドレスの女性達が歩き回っていました。

ミュンヘンの街は **Neues Rathaus** を始め、**Marienkirche**、見るべき名所は限りがありませんが、一日だけの見物で、長かったヨーロッパ滞在を終えるため帰国に備え8月1日には列車でパリに戻りました。

ところが、約束の事務所（リュクサンブール庭園に面した大通りを少しだけ南に行ったところにあつたように思います）に集合してみると、8月2日（金）に予定されていた便がキャンセルされたため8月6日（火）に発つ便まで待つてくれと言うのです。こうして期せずしてパリに数日間足止めされてしまいました。これは単身の海外旅行の初心者にとってはたいへんショックでしたが、幸いトラベラーズチェックも僅かに残っていたし、安いホテルに残留することが出来たので、4～5日の強制的パリ滞在という課題が舞い込んだわけです。

おかげで、ルーブル美術館、印象派美術館、ロダン美術館、近代美術館等の訪問を含め、カルチュラタン・モンパルナス・ノートルダム・シャンゼリゼー・モンマルトルなど案内書なしのパリの街の放浪を経験しました。

8月6日（火）シャルルドゴール空港からやっと帰国の途につくことが出来

ました。8月7日(水)羽田国際空港へ無事帰着しました。

参考文献

- [1] Resonance Shape in Energy Spectra of Electrons Emitted in the Autoionization of the Doubly Excited States in He by Electron Impact: H. Suzuki, T. Takayanagi, K. Wakiya, and Y. Jimbo, Abstracts of Contributed Papers of the Fourth International Conference on Atomic Physics, Heidelberg, 1974, pp. 473-476.
- [2] 第4回原子物理学国際会議:
高柳和夫・鳴海 元・鈴木 洋、日本物理学会誌 Vol. 30(1975)144-147.